

せり だ  
芹 田



## 1 集落の歴史

### (1) 地名の由来

芹田村が古文書の上に初めて登場するのは戦国時代の末期、文禄（1592～96）ごろの越後国郡絵図である。そこには「御料所、此外三方分、芹田村、家4軒、12人…」とある。

芹田村は、田の中に芹が多く目立つので、よその村と区別して「芹田村」と呼んだのが語源であろうと思われる。芹は、食卓に上の野菜として古来から日本人にはなじみ深い。そのためか芹のつく地名が多く、県内には芹田が3カ所、芹川が5カ所、芹沢、芹山、芹久保等がある。この中で、南魚沼郡大和町の

芹田村は、当芹田村から移住していった村だとの説がある。

### (2) 小字名の変遷

芹田区有文書の天和3（1683）年の検地帳を見ると、12の小字名が記録されている。

ぬけ、上川原、五畝た、四十苜（四十刈）、久保田、本志者（干場）、屋敷前、屋敷うら、屋敷そへ（添）、家の前、家の浦、前手

・現在の小字名

五畝田、ヌケ、前手、三百平、中川原、大山、打上り、土屋

両者を比較すると、天和検地の小字名のうち、五畝田、ヌケ、前手の3カ所のみが現在

の地名として残っている。

また、安永9(1780)年の新田検地帳には、岩山の新しい小字名が記載されている。

### (3) 集落の形成

芹田村で最初に集落ができた場所は、集会所の山側であろうと想像される。それを裏づける地名として、天和の検地帳に記載されている「家の前」、「前手」が注目される。これが現在の地名「前田」になったものであろう。天和3年の検地帳に記録されている9戸の屋敷が、集会所より上の山側の小高い丘の意外と狭い一帯に、軒を寄せ合うように並んでいたと思われる。

その後、江戸時代中期から末期にかけて戸数が増加するにつれて、山側や上手、下手へと集落は伸びていったと思われる。石橋方向の下手は低地で水害の危険があるので、次に上手の「打上り」の尾根に住居ができたのであろう。これは天和の昔からの地名「ヌケ」が示すように、村の中央部の地すべりを避け

る生活の知恵だったと見られる。

このように芹田は、小黒川の水害と地すべりの災害を避けながら集落が形成されたのであろう。

### (4) 地理的環境と交通

芹田の集落は前面に小黒川、背面には急峻な山が迫っているため、水害と地すべりに脅かされながらの生活を強いられていた。今から三百余年も前の天和の検地帳に見られる「ヌケ」の地名が、昔からあった地すべりの脅威を証明している。また小黒川対岸に耕地があるのは、広がった芹田の沖田が小黒川の氾濫で分断された水害の歴史を物語っている。

明治初期以前の江戸時代の道は、上手の小黒へは「打上り」の尾根を登り、下って小黒の「谷地」「四百刈」を経て小黒集落へと伸びていた。下手へは集落下から石橋を通過して牧野で三国街道へつながり、安塚を経て江戸へ、一方北へ向かえば今町（現在の直江津）や高田へと続いていた。

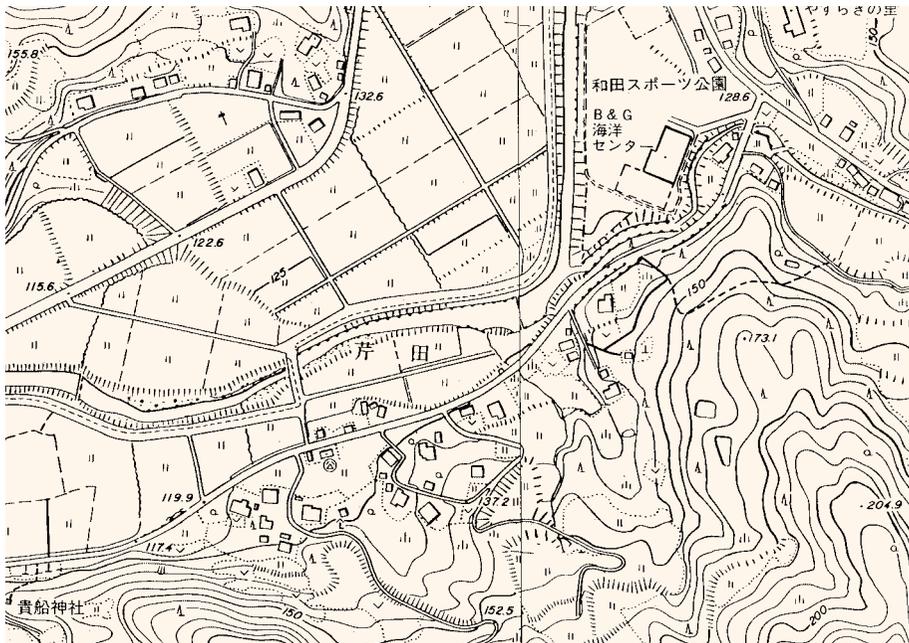


図3-15 大字芹田集落図

これらの上と下への道は芹田の重要な幹線であった。朴ノ木川の川幅は狭かったので、丸木橋が架かっていたとの伝承があり、大原から菱里方面への大切な道であった。

小黒川は川幅が広く、しかも春の融雪期や豪雨時は水量が多く、暴れ川であった。そのため、小黒川対岸の耕地への橋はなく、水の少ないときには徒歩で渡っていた。もっとも、大きな丸石がゴロゴロしている川原なので、荷物のないときは、石の背を跳ぶようにして渡ったのだろう。急流の小黒川は、増水時には危険なので渡し舟を利用した形跡はなく、水位の下がるのを根気強く待つしか打つ手はなかった。

現在の町道は村の中を南北に貫き、さらに、小黒川沿いにはリバーサイドの舗装道路が走り、対岸の耕地はコンクリート橋で結ばれて便利になった。この橋を自動車や耕運機で走る現代と、徒歩で川を渡る昔とを比較すると、長い歴史の流れを感じる。

(5) 芹田村の戸数・人口、耕地の変化

芹田村の戸数と人口が記録された最も古い文書は文禄ごろの越後国郡絵図である。

御料所、此外三方分  
 芹田村 中  
 本納 拾石六斗六升  
 縄ノ高 廿六石八斗八升四合  
 家四軒 拾貳人



写真 3-91 「慶長 2 年越後国郡絵図」 芹田村 (米沢市 上杉博物館蔵)

と、読むことができる。意味は「上杉大名の領地と、そのほか 3 人の家来の領地の芹田村、土地の評価は中位、納める年貢は 10 石 6 斗 6 升、縄高 (取高) は 26 石 8 斗 8 升 4 合、家は 4 軒で、人口は 12 人」となる。この家 4 軒 12 人というのは、田畑、屋敷を所有し、経営が安定している農家の数で、実数はもう少し多かったと思われる。

文禄から約 90 年後の天和 3 年の検地では、田畑、屋敷を所有している者は 4 人で、庄屋は 1 人で屋敷を 3 つ、ほかの 3 人はそれぞれ屋敷を 2 つ所有している。これから推察すると、本百姓は 4 軒、それに従属する百姓は 5 軒、合計 9 軒の戸数があったと思われる。

表 3-20 戸数と人口等の推移

年号	西暦	戸数(戸)	人口(人)	縄高
慶長 2	1597	4	12	26石 8 斗 8 升
天和 3	1683	9		61石 3 斗 7 合
安永 9	1780			新田 5 石 2 斗 9 升 5 合増加
文政 7	1824			新田 1 斗 2 升 6 合 増加
明治 5	1872	24		
明治 22	1889	25	156	
昭和 12	1937	21	146	
昭和 30	1955	21	120	
平成 12	2000	15	46	
平成 15	2003	15	42	

江戸時代末期の戸数は不明であるが、他の村の資料等から推察すると、明治初年ごろの約 24 戸に近い数字になっていたと思われる。

昭和年代末期から平成年代に入って過疎化が進み、戸数と人口は減少した。

(6) 南魚沼郡大和町芹田村との相互訪問

南魚沼郡大和町に芹田村があり、平成元 (1989) 年 6 月 6 日、一行 20 人が当芹田村を訪問した。次に平成 12 年、21 世紀魅力発見事業で、当芹田集落一同が大和町芹田集落を訪

問し、交歓会を開いた。

当安塚町の芹田村は文禄の絵図（1592～96）に記載されているのに対して、大和町芹田村は、文禄ころは藪上庄市野江村の枝村であった。正保国絵図（1644～47）に、芹田村の村名が登場する。

大和町芹田村の人たちの話では、青木家所蔵古文書に「上古、物部家に従へる25部族の其の一に芹田物部あり…」とあり、安塚町芹田は名称も同じく、この芹田物部の苗裔に因縁があるのではないかと、という。

安塚町の芹田村から大和町へ分村移住したとの説もある。前者の芹田物部の先祖が共通ではないかと、後者の安塚よりの移住説ともに、それを確実に裏づける資料は見つかっていない。

## (7) 用 水

安永9（1780）年の新田検地では、高5石2斗9升5合も増加している。これは、現在も利用されている朴ノ木川からの芹田用水堤と用水路が完成し、開田が進められた結果であろうと思われる。

芹田用水は取水後に狭く、しかも急傾斜面で用水路を作れない場所を引水しなければならなかった。そこで、固い岩をくり抜いて用水トンネルを通し、苦勞して引水している。トンネルの中は暗いので、照明用のカンテラを置いた小さな窪みが残っている。ほの暗い灯火のもと重労働が思いやられる。

それより以前、朴ノ木川上流の小黑では正



写真3-92 カンテラを置いた窪み

徳3（1713）年、切越より取水する小黑下江用水が既に完成していた。さらにその後、弘化元（1844）年、菅沼より取水する切越村、小黑村の上江用水が完成している。そのため、芹田用水の水源が不足になり、弘化2年、小黑村へ故障を申し入れている。

江戸時代の「故障」とは「異議」とか「差し障り」という意味で、簡単に言えば「物言い」をつけることで、よく使われた言葉である。このときは樽田村の庄屋、沖右衛門が立入人として仲裁に入っている。話し合いでは次のように決定している。「小黑村下江古用水の内、同村地内字八幡沢にて、定木相ふせ甲乙なく五分通り芹田村へ分水いたし、大川へ落とし入れ申す可く定め、以後勝手次第取引候共、芹田村にては断り申分これなく約定の事」と、きちんとした文でまとめている（用水についての詳細は通史編近世第5章第3節用水開削の項を参照のこと）。

## (8) 災 害

芹田は背後に急峻な山が迫り、前面は小黑川が流れ、しかも、朴ノ木川が合流するために災害が多く、厳しい自然との戦いの足跡が残っている。

地すべり地の急斜面の所有境界は、斜面の下から山の頂上まで見事な縦割りになっている。毎年すべる境界で、もめ事が多く、その解決策として縦割り方式が考え出されたのであろう。幅は狭いもので1間半、広いものは5間くらいあり、地すべり地帯に住む者の生活の知恵といえる。

元治元（1863）年8月、川浦代官所へ、「大洪水で用水の堰が残らず流出したので、御検分の上、修復の許可をして頂きたい」（中屋家文書）と申し出ている。

また、安永9年の「小黒川<sup>かわかけ</sup>川欠、及び地すべりの復旧人足割り付け書き上げ帳」が残っている。川欠とは、洪水で川の土手が欠けて落ちたということで、その復旧人足書き上げの分厚い帳簿が現存する(芹田村中屋家文書)。

災害の足跡として、古い小黒川は対岸の本郷の国道バイパスの東、山寄り辺りを流れていたものが大洪水で現在の川筋になったと伝えられている。芹田の耕地が小黒川対岸の本郷側にもあることが、それを物語っている。

## 2 神社・堂跡と石造文化

### (1) 神社

芹田の神社は貴船<sup>きふね</sup>社で、祭神は大山<sup>おおやま</sup> 昨<sup>かみ</sup>神である。明治40(1907)年11月22日、旧中屋宅の山側にあった神明社、祭神豊受大神を貴船社に移転し合祀した。

貴船社は石祠であったが、明治43年8月6日、木造社殿を新築した。



写真3-93 芹田の貴船神社

一方、安塚の禅宗、賞泉寺、19世住職の浦<sup>うら</sup>壁<sup>かべり</sup>良<sup>りょう</sup>観<sup>かん</sup>の「堂宇合併願」には、

東頸城郡小黒村大字芹田 名称 地藏堂

#### 1、本尊 三体地藏

右本村大字芹田所在の堂宇ニシテ信徒僅カニ、五・六戸ニシテ到底法要執行、又ハ維持ノ完全ヲ期シ難ク、甚ダ遺憾ニ付、此度当郡安塚村大字安塚、賞泉寺へ合祀シ(中略)明治40年

と、願いを提出している。

これらから、芹田の堂は建物はなく、浄土真宗とも禅宗とも区別せずに村中で信仰し維持管理してきたが、「完全を期し難く」と堂を合祀、移転している。



写真3-94 地藏堂の跡に残る、江戸時代の馬頭観世音(左)と3体の地藏菩薩

(小日向元太郎管理)

### (2) 堂跡と石造物

地蔵堂 明治16年、新潟県令に提出した地蔵堂由緒書きには、

- 1、祭地蔵 虚空蔵菩薩
- 1、由緒 創立年月不詳  
往昔石碑ヲ以テ祠トス、和銅式歳石像ヲ彫刻シ旧碑ト共ニ安置ス
- 1、本殿 本堂ナシ 六尺四方土盛三尺ヲシテ本殿トス
- 1、主管 小黒山 専敬寺

と記録されている。

## 五輪塔



写真3-95 戦国時代の五輪塔  
(珠坪文雄管理)